

揮毫 一心寺長老
高口恭行師



2023年7・8月号

号外 7
2023

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第9回

真田山陸軍墓地
(天王寺区)

Osaka Metro玉造駅からすぐの場所にある宰相山西公園。その先に墓地の入り口があります。少し奥まった場所だからでしょうか、訪れたことがある人は案外少ないようです。近くにある高津高校のOBでありながら、筆者が入ったのも10年ほど前が最初でした。夏の暑い盛りでしたが、ここだけは空気が澄み、時間が止まったようだったことをよく覚えていてます。高津高校の先輩である美術家・森村泰昌氏は「墓地に吹く風は、どこかしら寂しげであり、またどこかしら平穏」と書いていました。真田山陸軍墓地は、かつて全国に76か所あったとされる軍用墓地のなかでも最大級であり、多くが再開発などで失われていく中、最もよく元の形を残しているといわれます。設置されたのは明治4(1871)年で、日本で最初にできた軍用墓地でもあります。西南戦争、日清・日露戦争、第二次大戦など時代を経るごとに墓碑は増え、その数は優に50000基を超えました(写真右)。その他、納骨堂には8000余の遺骨が納められています。



墓碑の数は5000を超える



桜が咲き誇る春も美しい

中原文雄／写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行／文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会(ずえ)とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うえまちweb」(https://uemachiweb.com/)連載の「上町台地」名所図会より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。



相羽秋夫の

らくご ハローワーク

第19職 義士物は『中村仲蔵』に極まれり

歌舞伎は、江戸初期に京都・鴨川の河原、今の南座の辺りで、出雲の国からやってきた阿国(おくに)が、「かぶき踊り」を演じたのが始まりとされている。この阿国が、歌舞伎役者の第1号である。その後、市川團十郎、坂田藤十郎などの名人上手が現われ、江戸中期以降、人々の最大の娯楽になった。



仲蔵の名跡は現在では途絶えているが、明治初期までは3代目が名優との評価を欲しいままにした。昔も今も歌舞伎役者は、どこか艶(なまめ)っていて、妖(あや)しい。

ものにした。紹介する落語は、仲蔵がかけ出しの頃のエピソードを描く。
仲蔵に、「忠臣蔵」五段目の定九郎の役が与えられた。あまり重要な役でなく、人目にも付かない、いわば損な役どころである。そこで仲蔵は、これまでの演出ではなく、なんと新機軸を出したいものだと考える。
しかし、良い案を思いつくわけでもなく、悶々と日を送る。仏に願をかけて日参しているある日、帰り道で雨に降られ、雨やどりに近くの麦麴屋に入る。そこへ、壊れた蛇の目傘を半開きにした浪人が駆け込んでくる。「これだ！」と仲蔵は、その浪人姿を真似て舞台上上がるや大受けに受け、中村仲蔵の名は江戸っ子の間で有名になる。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06-6779-7222

「web版

うえまち新聞」

新連載も続々と!

「うえまち新聞」が、web版として本格的に復活しました。上町台地界隈のニュースやイベント情報、連載記事も第1回からご覧いただけます。新連載もスタートしています。協賛企業や地域の交流の場となる「うえまち長屋」の会員も募集中です。詳細はうえまち編集局へお問い合わせください。



https://uemachiweb.com/
うえまちweb 検索

住まいと暮らしの

総合無料相談会

7月8日、9月9日(土)
10時~12時

弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士の当法人会員が専門知識を生かし、住まいと暮らしのご相談に応じます。電話またはHPよりお申し込みください(電話受付は平日10~15時)。

主催：NPO法人まち・すまいづくり
(市立社会福祉センター指定管理者)
電話：06-6779-7222
場所：大阪市立社会福祉センター
(天王寺区東高津12-10)
後援：天王寺区役所

第42回うえまち寄席

8月12日(土)14時開演

桂佐ん吉、桂ちよびによる、古典を中心とした落語会です。電子チケット販売サイト「TIGET(チケット)」からも予約可能です。

場所：一心寺南会所(天王寺区逢坂2-7)
入場料：2000円



2023年7・8月号

号外 2023 8

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第10回

天王寺駅阪和線ホーム(天王寺区)

阪和線ホームと呼ばれるJR天王寺駅の1〜9番線は、もともと阪和電気鉄道(阪和電鉄)が作ったものです。ホームがくし形(頭端式)なのは、そのターミナル駅だったころのなごりで、駅だけでなくいまの阪和線自体、阪和電鉄が敷設しました。同電鉄は1929(昭和4)年に開業。南海電鉄との合併を経て、44年に戦時買収で国鉄阪和線(当時は省線阪和線)となりました。

ホームを覆う大屋根は、ほぼ阪和電鉄が開業した当時のままでそうです。天井の高いドーム型屋根の鉄骨は実に美しい構成で、ヨーロッパの駅を彷彿とさせます。少し薄暗いところも、独特の雰囲気を出しています(写真右)。写真左は9番線から見た阪和線ホーム。

個人的なことですが、父が和歌山県太地町の出身であったため、子どものころの筆者は毎年のように特急「くろしお」号に乗せてもらいました。当時のくろしおの始発駅は天王寺で、阪和線ホーム(1番線)に停まっている、ボンネット型をしたキハ81型の車両を見るたびに心躍らせたものです。

しかし、紀勢線の電化によってキハ81型は姿を消しました。特急くろしおの始発駅も新大阪駅に変わっています。それでも、いつか再び阪和線ホームに停まる特急で和歌山方面に向かってみたい。そんなノスタルジックな気持ちにさせる何かが、あの屋根のホームにはあります。

同じような思いを持つ人はきっと多いことでしょう。



美しい構造の大屋根は開業当時のまま



いまでは珍しい櫛型ホームが特徴的

中原文雄/写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行/文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会(ずえ)とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うまじまちweb」(https://uemachiweb.com/)連載の「上町台地」名所図会より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

らくご ハローワーク



相羽秋夫の

第20職 お目当ての『宿屋仇』は隣室に

た。室町期にできた木賃(きちん)宿は、木賃(もくせん)宿とも呼ばれ、燃料費だけを取って旅人に自炊させる安宿である。1931(昭和6)年に簡易旅館と名称が変更された。

江戸期には、この木賃宿や旅商いの人相手の商人宿の他に、飲食と入浴付きの旅籠(はたご)が主流になった。これが、今日旅館・ホテル・ビジネスホテル・公共宿泊施設・ペンション・民宿など多様な形式に発展していく。

旅籠は、旅人の給仕をし売春も兼ねた飯盛り女がいる飯盛旅籠と、そうでない平旅籠に二分される。また、大名・役人・勅使(ちよくし)・門跡(もんぜき)・高貴な僧(そう)などが宿泊する幕府公認の宿である本陣(ほんじん)と、大名の参勤交代の折に、多人数のため本陣に入り切れない供人用の脇本陣が、五街道の宿場に設置されていた。

旅の道中には、護摩の灰(ごまのはい)とか胡麻の蠅(ごまのはえ)と言われる、旅人の扮装をして財物を盗む盗賊が多く出没した。そのため、旅立ちや無事に帰った時に、旅籠振舞(はたごぶるまい)とか旅籠振い(ぶるい)と称する祝宴を上げた。昔の旅は命がけなので、そうタビタビできなかった。

大坂・日本橋の宿屋に1人の武士が泊まる。長旅で疲れているので静かな部屋に案内してくれと頼むが、隣室に入ったのが、伊勢参宮を終えた兵庫の3人の男たちだった。宵の口から芸者を挙げて大騒ぎ。果ては寝床の上で相撲を取り出す。武士はその都度抗議するが静かにならない。

男の1人が、武家の妻との不義が夫に見つかり、男はその夫を殺害したと作り話をしているのを耳にした武士、「これは義弟殺しの犯人だ。やっど仇に会えた。明朝、敵討ちをするので3人を逃すな」と宿の者に厳命する。

翌朝、「彼らをどういたしましょう」とお伺いを立てると、武士にっこり笑い「ああ申さぬと夜通し寝かしおらん」。

宿は平安末期に、京・奈良・港町・街道の主要集落などで始まった。その後、寺社の門前にも参拝者相手のものができる



大人のための

文章教室

ライター・編集者 松本正行

短い文がわかりやすい
とは言うけれど...

日本の出生率は低い。大幅な人口減少も予想される。人口の減少は経済力の低下を招く。早急に手を打たなくてはいけない。

「一文を短く」は文章を書く際の基本です。長い文章は読みにくく、文意もつかみにくいです。短ければ短いほどよい。わけではないのでやっかいです。例文は短文が連続しています。このまま短文ばかりが続けば、読みにくさを感じることでしょう。修正文では「。」を1つ減らし「、」に変えました。「経済力の低下」が「手を打つ」理由なので、その関係も明確にし、文意をとらえやすくしています。

日本の出生率は低い。大幅な人口減少も予想される。人口の減少は経済力の低下を招くため、早急に手を打たなくてはならない。

文の「読みやすさ」にはリズムが関係しています。短文と長文が適度に混じっているのがリズムカルでよい、とされるのです。先の文章も短・短・長にし、変化をつけています。

文のリズムをよくするには音読が一番です。音読し「リズムが悪いな」と感じた部分は文章の長さを変えてみましょう。さうと「これが読みやすい」が見つかるはずですよ。

上町台地上にある高津高校出身。新聞社・出版社勤務を経て、現在、Webや雑誌等で活躍中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。